

鯨 研 通 信

第 312 号

1978年 1月

財団法人 日本捕鯨協会 鯨類研究所 〒135 東京都江東区越中島1丁目3番1号 電話 東京(642) 2888 (代表)



珊瑚海、南熱帯太平洋並びにインド洋に於けるニタリクジラの胃内容物調査結果について

北海道大学水産学部 河村章人

はじめに

第31次南鯨(1976/1977)に際して水産庁は南半球産ニタリクジラの特別捕獲調査を実施した。すなわち、資源学的にはいわゆるヴァージン・ストックに近い同海域のニタリクジラを特別に捕獲調査し、鯨類資源の資源学的、生物学的知見の空白を一挙にうめようとするものであった。もとより単発の調査から得られる知見は自ら限られたものではあるが、現在に至るまで大がかりな商業的捕獲から隔離されていた温暖海域におけるニタリクジラに関しては科学的調査をするのは大げさにいえば有史来初のでき事であり、それだけに調査担当サイドとしては結果や如何に、とばかりの得も云われぬ期待感があつたとおもう。何に對する期待であるかは夫々の科学興味がおもむくまであるけれども、まずは生息しているのが分っていないが目前に手にとって調べることができなかつたものが、ともかく現実のものとなるのだ、という辺りにあつたのではないかとおもう。

ともあれ、1976/1977年漁期には2船団(第2図南丸と第3日新丸)総合計225頭(オス130、メス95)のニタリクジラが前述の南熱帯海域において捕獲され、応分の調査を果して終了した。本特別捕獲調査からゼネレートされる資源生物学的の情報は未だのように思われるが、調査実施の概要についてはすでに遠洋水研の大隅清治博士により今年6月のIWCキャンベラ年次会議資料として提出されており(大隅、IWC/SC/38/1977)、筆者も本稿と似たようなタイトルにて同会議資料として提出しておいた。報文としては何れ鯨類研究所の英文報告(No. 29, 1977)に掲載が予定されているが、勿論それとても標本の収集規模からいってテンタティブなものである。ここではその同

じ結果についてのべ、併せて筆者なりの本調査の意味づけとでもいうべき考察を付記して概説し、捕鯨母船船上にて直接調査を担当された、種々方面の方々にも本特別捕獲調査の行方について報告をしておくものである。この種の調査は大型鯨類の生物学にとってはもちろんであるが、筆者のような海洋のもう少し低次の生産者レベルまでを興味とする立場から言っても、興味深い知見や概念の裏づけとなるような事実があり、この点同様の調査が毎漁期継続的かつ多様性に富んだ計画で実施されることを強く希っておきたいとおもう。

資 料

1976/1977漁期には第2図南丸と第3日新丸の2船団が稼働し、前者は珊瑚海並びに南熱帯太平洋に於て通常の南鯨漁期開始に先立って合計120頭(オス69頭、メス51頭)を、後者はマダガスカル島南方海域に於て、捕獲枠達成後に、計105頭(オス61頭、メス44頭)を夫々捕獲した(図1-2)。

胃内容物の調査では捕獲全頭数についてその質と量の観察所見が記録され、何等かの内容物が存在する場合にはすべて標本採取の対象とした。その結果、南熱帯太平洋、珊瑚海から69標本、インド洋から52標本、合計121標本を得ることができた。

胃内容物標本は鮮度の別なく採集されたために、1標本中相当数は消化による劣悪な状態にあつた。しかし結果からいえば餌生物を構成したのは3種のオキアミ類だけであつたため、消化されていても同定上問題となるオスの游泳肢とか交接器などの付属肢類が比較的よく残存していたことや精包囊の有無等によって種の査定を行なつた。またこれによって遊探知をするような恰好で母船上において記録された餌生物の種類

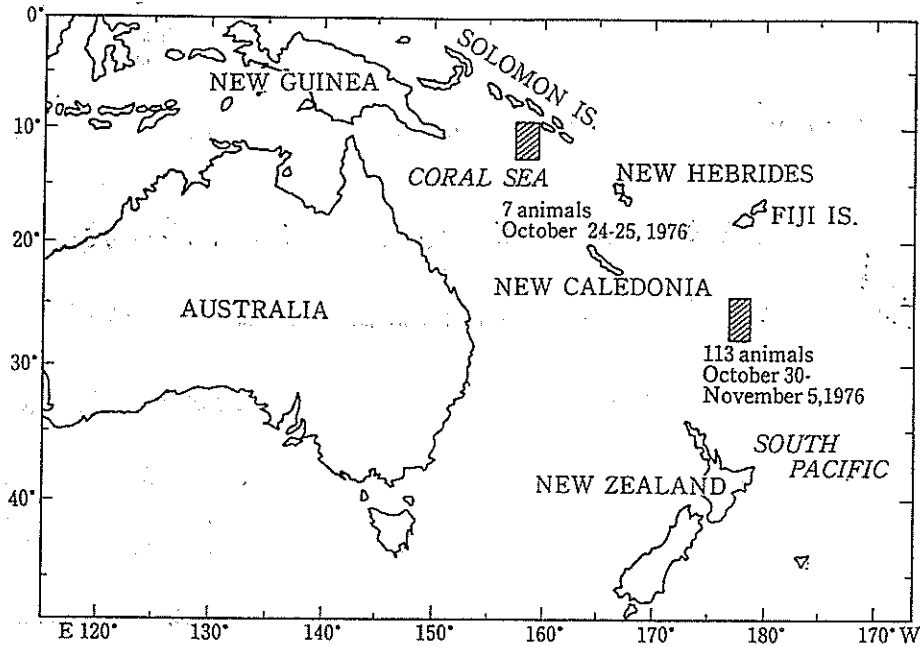


図1 1976/1977年漁期の特別捕獲調査におけるニタリクジラの捕獲海域を斜線で示す。(第2図南丸船団)

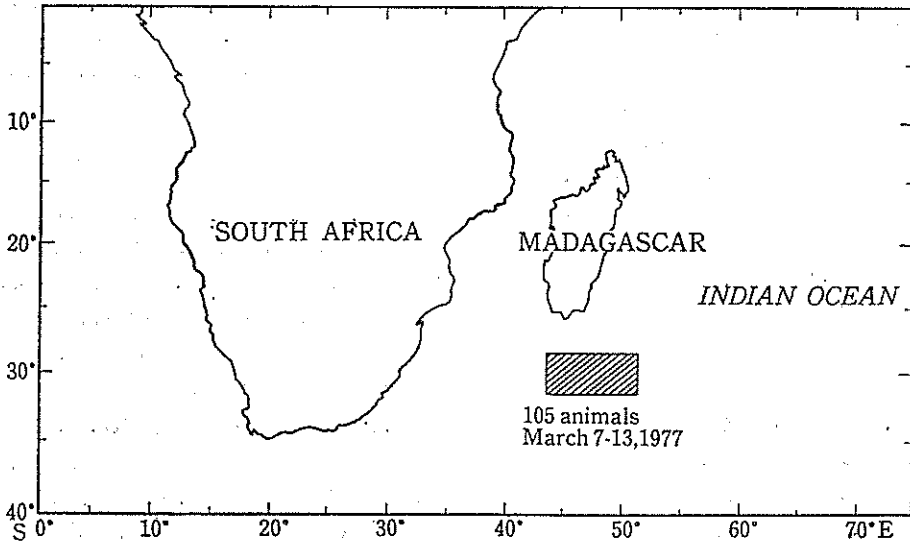


図2 図1に同じ(第3日新丸船団)

を相互にチェックすることができ、この結果からもオキアミ類以外の餌生物が出現しなかったことを確認した。

結 果

1) 捕獲鯨の摂餌状況

鯨の捕獲簿台帳から従来の5段階方式による胃内容

物調査の結果をみると、まず全体として何等かの胃内容物ないしはその残渣をとどめていた個体が意外に多いことに気がつく。珊瑚海、南太平洋、インド洋の各漁場すべてにおいてである(表1)。この点特に興味深いのは珊瑚海や南太平洋など本来海洋の低次生産力が低く生物の現存量が少いと考えられる海域においても、前者の場合約71.5%、後者で75.2%に及ぶ個体が

表 1 珊瑚海、南太平洋並びにインド洋におけるニタリクジラの胃内容物調査結果の概要

珊瑚海					
胃内容物量	空胃	少しあり	中	かなり多	満腹
調査鯨体数	2	2	1	1	1 (= 7)
全数に対する%	28.5	28.5	14.3	14.3	14.3 (=100)
南太平洋					
胃内容物量	空胃	少しあり	中	かなり多	満腹
調査鯨体数	28	47	19	12	7 (=113)
全数に対する%	24.8	41.6	16.8	10.6	6.2 (=100)
インド洋					
胃内容物量	空胃	少しあり	中	かなり多	満腹
調査鯨体数	56	21	10	1	17 (=105)
全数に対する%	53.3	20.0	9.6	0.9	16.2 (=100)

何等かの捕食残留物を第 1 胃中にとどめていたことにあり、一方インド洋マダガスカル島南方の漁場ではこの値が 46.7% に落ちている。この海域は南アフリカ近海では捕鯨漁場であり、この点前二者と比べると今少し高い捕食率がみられても不思議ではないはずである。

胃の充満度について個々の場合をみると、“moderate” (捕獲台帖で—rr—に相当) がほぼ 25—50% の充満度であるから、この場合全体的にはかなり多数個体がこの範ちゅうに入ることとなる。これらは捕獲された動物が普通一日を単位として摂食活動をするそのある瞬間 (捕獲時間) における様態を示すものであるから、この結果がたまたま胃中に少量の餌をとどめていたものであるのか、あるいは海域としての餌の分布量が基本的に少きが故なのかは判然としない。しかし、“rich” (50—75%) とか “Full” (75% <) であった動物も略々 17—29% にわたって出現しているところから推せば、珊瑚海や南太平洋といえども餌生物の分布量が必ずしも少いとはいいい切れず、逆説的に考えれば年間を通じて “few” や “moderate” としかなり得ぬ程の餌生物の分布量では、鯨類の運動熱収支の上からもかかる摂餌状況が定常的なものであると考えることは疑問であろう。

南極のロス海といえれば戦後しばらくの間はシロナガスやナガス捕鯨のメッカであったが、これは即、同海

域が夏の優良な摂餌場としての位置にあったからである。その後ロス海漁場が種々要因からかえりみられなくなって久しいが、1966/1967 年漁期以降は毎年のようにロス海附近に操業がみられるようになった。この場合の捕食率 (胃中に餌ありの個体数/全調査個体数 × 100) をみると、1946/1947—1953/54 漁期では 44—55%、1966/1967—1971/1972 漁期では 45—59% となっている (河村、1977/IWC/SC/12、東京)。つまり名だたる鯨の摂餌場においても一日単位の摂餌パターンを捕獲という瞬間で切った場合の捕食率は高々 60% ほどまりなのである。

少しまわりくどいが、ここで問題にしたいのは、こうした事実と比較した場合に今度のニタリクジラの捕食率が熱帯という特異な海域にしては意外に高いということであって、餌生物の分布様式と併せて熱帯外洋海域における食物網を扱う上で示唆に富んだ一事実ではないかということなのである。

2) 捕獲時間と胃内容物量

ニタリクジラの捕獲時間とそれに対応する胃内容物量を調べたが特に定った傾向はみられなかった。珊瑚海と南太平洋産の動物では空胃であったものが 10 月は 44.4%、11 月には 13.3% と変化があったが、インド洋産の動物では 3 月 7 日—13 日という時間シリーズ内ではさしたる変化もみられなかった (表 2)。ただ全体の捕獲数が 225 頭にすぎないので細分化したこの種の調査からは何かを引出そうとする方が無理なのかもしれない。ともあれ、表 2 を眺めてみると、何等かの餌の残留をみとめた個体は 05 時—18 時或いは 06 時—15 時にわたって割合平均して出現しており、いわゆる早朝と夕刻にピークをもつ二山型の分布はみられない。しかしこれが資料数の僅少なることによるものなのか、あるいはこれが熱帯外洋域でのあるべき内容がある程度反映しているのかは判然としない。珊瑚海と南太平洋では 09 時に時間シリーズ最高の 87.5% の捕食率があったが、最小が現われたのはこれよりも 1 時間前の 08 時 (60.0%) である。これがインド洋では最高が 06 時と 09 時 (66.7%)、最低が 14 時 (16.7%) である。資料数は少ないが、表 2 から判断するにぎりニタリクジラは昼間といえども摂食していることが考えられ、“rich” や “Full” のカテゴリーになる飽食ないしそれに近い状態にある個体もかなり出現していることからひげ鯨は之より熱帯外洋の生態系における Key-member となる他種生物群にとってほぼ終日にわたって相当の餌生物のアヴェイラビリティがあるものとみななければならないだろう。

表2 捕獲時間と胃内容物量の別によるニタリクジラ個体数の出現頻度

捕獲年月	1976年10月24—30日						1976年11月1—5日					
	空	胃	少	し	中	計	空	胃	少	し	中	計
胃内容物量	空	胃	あ	り	多	腹	空	胃	あ	り	多	腹
05	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
06	3	—	—	—	—	3	1	6	2	—	—	—
07	3	2	—	—	—	5	2	8	4	3	1	1
08	—	1	—	—	—	1	4	3	1	—	—	1
09	1	3	1	—	—	5	—	—	—	—	—	—
10	1	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—
11	1	—	—	—	—	1	—	3	1	—	—	—
12	1	—	—	2	1	4	1	—	1	1	2	—
13	1	—	—	1	1	3	—	1	3	—	—	—
14	2	1	—	1	—	4	—	4	2	—	—	—
15	1	4	—	—	—	5	1	—	1	3	—	—
16	4	—	—	1	1	6	—	4	2	1	1	—
17	1	2	—	—	—	3	—	1	1	—	—	—
18	—	2	1	—	—	3	—	1	—	—	—	—
計	20	15	2	5	3	45	10	34	18	8	5	—
%	44.4	33.3	4.4	11.2	6.7	100.0	13.3	45.3	24.0	10.7	6.7	—

捕獲年月	つづき	インド洋						捕獲年月	つづき	計	餌あり個体の%		
		1977年3月7—13日											
胃内容物量	計	総計	餌あり個体の%	胃内容物量	空	胃	少	し	中	かなり多	満腹	計	餌あり個体の%
05	—	1	—	06	1	1	1	—	—	—	—	3	66.7
06	9	12	66.7	07	7	5	1	—	1	—	1	14	50.0
07	18	23	78.3	08	16	3	1	1	1	7	28	42.9	
08	9	10	60.0	09	6	6	3	—	—	3	18	66.7	
09	3	8	87.5	10	9	—	—	—	—	2	11	18.2	
10	1	2	—	11	2	1	1	—	—	1	5	60.0	
11	4	5	80.0	12	7	2	2	—	—	2	13	46.2	
12	5	9	77.8	13	3	2	1	—	—	—	6	50.0	
13	4	7	85.7	14	5	—	—	—	—	1	6	16.7	
14	6	10	80.0	15	—	1	—	—	—	—	1	100.0	
15	5	10	80.0	計	56	21	10	1	17	105	—	—	
16	8	14	71.4	%	53.3	20.0	9.5	1.0	16.2	100.0	—	—	
17	2	5	80.0										
18	1	4	80.0										
計	75	120	—										
%	100.0	—	—										

3) 餌生物の種類

総捕獲数 225 頭の中 121 頭から胃内容物標本が採取された。これらの全部を検鏡した結果、以下に記する 3 種のオキアミ類が同定された。

- Euphausia diomedea* Ortmann
- Euphausia recurva* Hansen
- Thysanoessa gregaria* G. O. Sars

10月の珊瑚海標本では *Euphausia diomedea* の雌雄成体が出現したが、一例だけは完全に雌個体のみからなる場合があった。これらの雌成体と一部の雄成体ではその胸部に 1 個の精包囊を付しており、この時期に交尾が行なわれていることを示していた。しかし、南太平洋とインド洋標本では *E. diomedea* 個体群は雄個体が完全に欠落し、いわゆる mono-sexual な

組成を示していた。捕獲数は僅か 7 頭ではあるが、珊瑚海標本は専ら *E. diomedea* から成っていた。他の 2 種は全く出現していない。

珊瑚海 (10月) 南太平洋 (11月)

E. diomedea (オス、メス) → *E. diomedea* (メス)
9°—12°S 24°—27°S

上記をまとめるとこの図式となるが、季節 (月)、緯度などが性組成の相違と関連がありそうに思われる。

Euphausia recurva は雄成体だけが出現した。雌は海の表層に居なかったのか死んでしまったのか、あるいは全く別の処にいたのか、ともかくニタリクジラの捕食の対象にはなり得なかった。この種類は南太平洋とインド洋標本からみつかっており、珊瑚海にはいない。南太平洋産の個体からは精包囊を付着している

ものは見つからなかったが、インド洋産の中若干のもの1ヶだけつけていた（今問題のナンキョクオキアミ、*E. superba* では2ヶ、時に4ヶの精包囊をつけているのが普通）。

Thysanoessa gregaria は雌雄成体が出現した。上記 *Euphausia* 2種は各々の漁場において広く分布がみられたが、*Th. gregaria* は南太平洋漁場に限り出現し、かつ漁場内での出現傾向が5ヶ所ばかりのローカル・グループに分れていた。このグループ間には個体群の組成上変化は認められないが、印象的にはそれら各々が繁殖集団を異にするように思われた。これら一連の観察結果は表3のとおりである。

表3 餌生物種と胃内容物の組成（表中数字は例数一個体数を示す）

漁場	珊瑚海・南太平洋	南西インド洋
船団	第2図南丸	第3日新丸
捕獲頭数	120	105
胃内容物標本調査数	69	52
<i>Euphausia diomedea</i>	17 ⁵⁾	4
<i>E. diomedea</i> / <i>E. recurva</i> ¹⁾	12	17
<i>E. diomedea</i> / <i>Th. gregaria</i>	1	—
<i>Euphausia recurva</i>	—	2
<i>E. recurva</i> = <i>E. diomedea</i> ²⁾	9	15
<i>E. recurva</i> / <i>E. diomedea</i>	2	8 ⁶⁾
<i>E. recurva</i> + <i>E. diomedea</i> ³⁾	3	5
<i>E. recurva</i> ≤ <i>E. diomedea</i> / <i>Th. gregaria</i>	3	—
<i>Euphausia</i> sp. ⁴⁾	7	1
<i>Thysanoessa gregaria</i>	10	—
<i>Th. gregaria</i> / <i>E. diomedea</i>	1	—
<i>Th. gregaria</i> / <i>E. recurva</i>	1	—
<i>Th. gregaria</i> / <i>E. diomedea</i> + <i>E. recurva</i>	3	—

- 1) 優先度順
- 2) ほぼ等量の混合
- 3) 2種の混合内容物なるも消化による損傷で両者の量的多少が不明のもの
- 4) 付属肢や精包囊の存在から *E. diomedea* か *E. recurva*、あるいはこの2種の混合したものと思われる
- 5) 17例中の5例が珊瑚海産標本
- 6) ホウネンソ1個体を含んだ1例を含む

表3は3種のオキアミ類が胃内容物として発見されたその組成別の出現内容を示している。いわゆる餌生物の組合せである。これで見ると、オキアミ類は多くの場合ただ一種だけで捕食されている。南氷洋でナンキョクオキアミが混り物もなくごっそり出てくるのと同じである。他の場合はこれら3種の中2~3種が適当に混合したかたちで出て来る。珊瑚海は *E.*

diomedea だけ1種、インド洋は *E. diomedea* と *E. recurva* そして南太平洋は前2種に更に *Th. gregaria* が加わる。ニタリクジラの摂餌環境としては一番多様性に富んでいることを示している。そして単一の種類組成で餌となっている場合が少くとも *E. diomedea* と *Th. gregaria* において顕著であることはこれら生物種の分布様式が基本的に mono-specificであることを示唆するものであり、生息空間の上からはかなりミクロなケースではあろうが、互に独立した集団で存在しているものようである。それらの分布集団のひとつ或いはそれ以上のものを、場合場合に依りて捕食した結果が多分に2~3種の混存する胃内容物として現われてきたものであろう。そしてこれら種毎の小集団は“rich”とか“Full”という胃の充満度（多分数百キログラムのオーダー）で考えると相当の個体数密度をもつはずで、おそらく宇宙の星雲にも似たような存在様式であろうと思われるのである。

考 察

熱帯外洋域では植物プランクトンによるいわゆる基礎生産力が低いことは周知のとおりである。今回ニタリクジラの捕獲があった珊瑚海や南太平洋は太平洋の下真中におけると同様、この基礎生産力は固定炭素量に換算して 100mg Carbon/m²(海面)/日 程度かそれ以下である。これはたとえば北洋の場合だと150~250 mg Carbon/m²/日、日本近海だと250~500mg Carbon/m²/日、程度の範囲にあるから珊瑚海の相対的な豊度が推察されたとおもう。

これら基礎生産力の余剰は動物プランクトンの消費に回ることとなるが、熱帯外洋水では熱帯湧昇域を除けばこの動物プランクトンの存在量も必然的に低くなるし、これまでの調査結果もすべてこの事実を裏づけている。例えば、珊瑚海では存在する動物性プランクトンの平均湿重量はほぼ 50mg/m³ 程度かそれ以下であり、これまた太平洋の下真中と同じ程度である。

インド洋のニタリクジラ捕獲位置は前者に比べるとかなり南偏しており、温帯海域に含まれているため前述の基礎生産量、動物プランクトンの存在量(現存量)も若干多くなっている。基礎生産量ではほぼ日本近海の値に近く、動物プランクトンは 50~200mg/m³、ほぼ日本の南西太平洋側(いわゆる黒潮の海域に相当)での分布量に近い。

要するに今回ニタリクジラが捕獲された場所は海の生物生産の内容からするとかなり砂漠然とした処であったわけで、しかし、それにもかかわらずニタリクジ

ラの胃中には相当量のオキアミが見つかった、というのが重要なポイントなのである。普通、熱帯の外洋水域といえばマグロ類やカツオの餌を調査してみるとハダカイワシ類とかヨコエソ類、イカ類などが主だった餌生物となっている。オキアミ類は出て来ないかごく僅かである。Roger と Grandperrin (1976) がマグロの胃の内容物を調べたところ全体では60%のものが前記小型浮魚類(微小遊泳生物)を食して居り、オキアミ類は僅か7%、またマグロの餌となった小型魚類の餌としては12%程度であった。つまり、熱帯外洋水という場所の生態系では一般にオキアミ類が果す役割はあまり大きいようには思われないのであるが、そのもっともありそうにもないことが熱帯域でニタリクジラを獲って見たら専らオキアミを食べていた、というわけで、これに対する驚きが大きかった。

実際、特別捕獲調査の計画中にはかかる海域でのニタリクジラの餌としては魚類やイカ類を想定し、船団には標本採取用として大きな布袋を配布したものである。勿論標本瓶も用意したがこれとて何時も南水洋で使用するものの2倍サイズのものを用意したのである。これは筆者の不勉強による単純な思いちがいであったのかも分らないが、多分に鯨類の生物学が専ら極海中心に進められて来たことによる知識の空白でもあろうと思われる。とはいえ、これは喜ばしき失敗のひとつであろうし、また今後何回あってもよいことである。

近年は南アのピーター・ベスト博士によってニタリクジラにも“offshore form”と“inshore form”のものが両者が形態、繁殖生理、摂餌生態等で異なっていることが知られている。“offshore form”のニタリクジラは南アの近海では10°C 台の水温帯にやってくる。しかし、全体的にみると、ニタリクジラは大村と根本(1955)の云うようにほぼ南北緯40°の間、つまり水温では20°C 以上の海洋に分布するとみられる。そしてそこではカツオ、マグロ類、その他大小浮魚類、イカ類等と生態系内での競合がおこっているはずである。繁殖海域にやってくるザトウクジラを調べるとたしかに胃中に何等かの摂餌をした痕跡をみるのは少いことが知られている。これがひげ鯨類全般に繁殖洄游中には餌を摂らないのだという考え方に定着したひとつの根拠となっているだろう。果して事実はそのようであるか、ということでそれを調べてみたのが先般本誌(266号、267号、1973)に書いたナガスクジラの運動と洄游に関する熱収支の問題であり、後にも少し論議を發展させた(河村、1976 今西錦司博士古稀記念

論文集、中央公論社)。ともあれ、この作業からゼネレートされたことは、ナガス鯨科のひげ鯨類の場合60°Sから0°までを往復する繁殖洄游をしたとすれば南極で正常に餌を食べてきた個体はほぼ熱収支がトントンであるが、もう少し現実的な鯨の動きを考慮するとどうしても洄游の途中のどこかで何がしかの餌を摂らなければならないと考えられたのである。そして、熱帯或いは亜熱帯の外洋水域でそうした目的に見合う場が実際存在するのかどうか、いまひとつの疑問として残っていた。

熱帯海域で鯨をみているとたしかに餌を摂っているらしいことがわかる。インド洋における国際共同標識調査の際、ギャムベルらの観察したのは追尾中にシロナガスクジラが赤い糞をしたことであり、それを摂餌の証拠として述べている(Gambell ほか、1974: IWC/SC/26/37)。その後、遠洋水産研究所の計画による、北太平洋南海域の鯨類標識調査航海(1975年1—3月)があり、筆者も同乗を許されてニューギニアの北方赤道海域に標識鯨を探索した(和田、1975: 本誌284号)。この航海ではニタリクジラが主であったが前記ギャムベルらの報告と同様に、全部ではないが、ニタリクジラが追尾中かなりの糞を流しているのがしばしば観察された。この時は北緯もひと桁の赤道直下なのであるいは珊瑚海などよりも多少生物の現存量が多い処であったかもしれないが、ともかく熱帯海域にいるニタリクジラも間違いなく、餌にありついていることがわかった。ただ問題は何を食べているのか、という疑問が依然として残っていた。

餌は小魚類かイカ類かという想定が見事にはずれたのは前述したとおりであり、事実上オキアミ類であった。正にフタをとってみなければならなかったことである。そして、マグロやカツオはオキアミを食べず(多分、食べることができにくく)、それをあちらこちらとひろい食いしてきた小魚どもを食べている。本調査で見つかった3種のオキアミ類は一般に雑食性という意味からすると、熱帯外洋水域においてもひげ鯨類の方がマグロ・カツオ類に比べて低次の栄養階梯に位置しているわけで、いわばハダカイワシやヨコエソ類と同じレベルにあるといえる。

今ひとつは結果のところでもふれたオキアミ類の分布習性である。*E. diomedaeae*, *E. recurva*, *Th. gregaria* という種類は温熱帯に普通にみられるが、これらの種は数百メートルのオーダーで日周垂直移動をし、普通には日中の表層に出てくることはない(例えば、Boden ほか、1955: Ponomareva, 1963, Machline

と Fisher, 1969 など)。そして、熱帯太平洋では日中表層にいる捕食生物にとって捕食の対象となりうるオキアミ類とはいば小さな *Stylocheiron* (属) という種類だけである (Roger と Grandperrin, 1976)。

ところが、これもフタをあけてみると日中堂々と、しかも相当多量のものが海の表層——鯨の摂餌可能水深——に分布しているという事実であり、それが珊瑚海、南太平洋、インド洋の 3 漁場共に共通した現象であることである。胃内容物の組成のところでのべたように、このことは恐らく単一種からなるオキアミの小規模集群と関連し、プランクトン採集網を用いる通常のサーベイではつかみ難い分布様式の問題で、むしろ捕食動物の胃内容物調査から判明する事実も多い。例えば、オキアミ類についての根本(1962)、キタノサクラエビ (大森ほか, 1972)、コベボード (河村, 1974) の諸例にみるがごときである。この意味でニタリクジラの食性調査が温熱帯海域におけるオキアミの分布生態にアプローチするひとつの手段となることも明らかである。

紺碧の海面をのぞき込んだとて何もみえるはずはな

いが、そのむこうでは人知れず様々の現象がおこっている。個々の科学的事実はそのなりにひとつひとつが興味深い、今回のニタリクジラ特別捕獲調査はひょっとするともう少し巾のある科学方法論とでもいべきものについて、示唆を与えるでき事であったのかもしれない。これまでにかんりの語数を費してオキアミだ、餌だ、とさわいできたが、これとて僅か 225 頭、121 標本が示したある時間断面の現象であるのかもしれない。とすれば、この次にはいったいどのようなドンデン返しを食うであろうか。一方ではこれが永遠の事実の一端であったことを願いつつも、他方ではまた異った事実が出てくるかもしれないというこわいもの見たさの、こそばいい期待観があるのもまたの本音とといったところである。

終りに、この特別捕獲調査において標本採集や資料の整備に便宜をいただいた遠洋水産研究所鯨類資源研究室、日本共同捕鯨株式会社深く御礼を申し上げるとともに第 2 回南丸、第 3 日新丸船上で現場の労をとられた事業部員並びに作業員の各位に対しても感謝の意を表したい。

鯨 捕 り の 話

「笠沙の民俗」より

はじめに

鯨研通信 275 号 (1974年 7 月) に奈須敬二さんが薩摩半島に揚ったザトウクジラの話を書いておられる。

この笠沙町に郷土誌編さん委員会というのがあって「笠沙の民俗」という本を作った。この中に「鯨捕りの話」が載っている。これは同委員会の委員の姥国家さんが、木場英弥氏 (当時 75 才) の談を纏めたものである。読んでみて非常に面白いので、同委員会のお許しを得て、ここに再録する次第である。なほこのことについては笠沙町役場の崎向幸和さんと奈須敬二さんに非常にお世話になった。ここに厚く御礼を申し上げる (編集子)。

鯨 捕 り の 話

笠沙でとれる鯨は、主にザトウ鯨とナガス鯨であるが、時たまセミ鯨もとれることがある。ゴンドウ鯨が

イカを追って来て、浅瀬に乗り上げ泳げなくなってしまうことが時々あり、一度など 29 頭とつたこともあったが、これなどはごく稀な例である。

大きいものではナガスの 13 間、ザトウはあまり大きくなくて 6 間位のものである。このザトウは春の彼岸ごろ、よく岸近くやって来るので彼岸鯨と言っている。

笠沙で鯨を捕るのは、ほとんどが大敷網に入った鯨である。

鯨とりの主役は何といってもハナトオシドン (鼻通し殿) である。ちょうど牛の鼻にハナグイを通すように、鯨にも鼻中隔に綱を通して鯨を制御するのである。

ハナトオシドンは、勇気があり思慮にたのみに人でなくてはならず、またこれに慣れていることも必要である。小浦の山下市二という人が死んだ後は、そのあとを継げる人がいない。

ハナトオシドンは左手にメグイ綱をつけたハナトホ

シの竹ベラをもち、右手に軟鉄製の「メグイ庖丁」という庖丁をもって鯨の近よるのを見すまし、その頭に飛び乗る。鯨の鼻の前方に尾の方を向いて乗るのである。

これは、もしもの時、胸びれ（タツパという）や尾びれ（オバという）に叩かれないように泳いで逃げるため、それには、タツパやオバがよく見えるように後向きに乗らねばならない。

ハナトオソドンは、鯨にふり落されないように十分気をつけながら、メグイ庖丁を鯨の背でたたいて曲りをつけ、閉じた鼻孔から鼻中隔を通し貫き、その庖丁にメグイ綱をつけた竹ベラをのせて元に引きぬくと、一瞬にして鯨の鼻に綱が通る。

鼻中隔は実に丈夫で、鯨の体重をかけても決してちぎれることはない。この鼻綱で鯨を制御しながらコンアミを狭めてゆく。

タツパやオバに一触されただけで、ヒコ舟は簡単に顛覆し、乗っていた人々は海に投げ出される。何隻もひっくり返されて大さわぎになることが多い。

鯨の運動がおさえられてくると、ダンベ舟（5間ぐらいある積舟）2艘で鯨の体をはさむようにし、ダンベ舟の間に2体の孟宗竹の柱を渡す。前の柱には鼻綱をくりつけ、後の柱にはタツパに孔を通し、後手にくくったように結びつける。オバが恐ろしいので、コン綱のあまった部分をみな被せる。

コン綱に包みこまれ、ダンベ舟にはさまれ、柱に鼻をつり上げられては、さしもの鯨も身動きができなくなってしまふ。

ここまでで一日の仕事は終る。もうその時は夕方になっているので、一応仕事を止めて、鯨はそのまま沖におく。

つながれた鯨の「ウォーン・ウォーン」と牛のようななり声で鳴き続けるのが、夜の海を渡って遠く部落にまで聞こえる。そのため子鯨のときは親鯨が、親鯨のときは子鯨がこの声を聞きつけ、沖からやってきて、これも捕まってしまうことがある。夫婦鯨はよく2頭一緒に綱に入ることがあるが、これを2本物という。

翌日は満潮をみはからってダンベ舟につり上げられたまま鯨を浜に寄せ、引き潮になってから浜に揚げる仕事をする。

ダンベ舟をはずし、孟宗竹もはずす。鼻綱を陸上に据えられたカグラに仕掛ける。

鯨を浜に引き揚げるにはこの鼻綱1本です。鯨を引き揚げる要領が面白い。鯨にも人間と同じ様に、く

すぐつたいという感覚があるらしく、竿の先で、タツパのまわり、即ち、人間でいえば、わきの下や眼じりのあたりを突つくと、体をばたつかせ、ころがったりくねらせたりして動く。このときを見てカグラを巻くと、みるみるうちに大きな鯨がずっずっと引き揚げられてゆく。

鯨の解体をする人をクジラキイという。この専門の人が赤生木のタツゴエ（現在の笠松・清水部落）にいた。漁師は鯨を捕る仕事はしても解体はしないものであった。鯨が獣であるためかもしれない。

鯨がとれた、ときけば、赤生木からクジラキイのセンズ（船頭で首領の意味）が10人ほどを率いてやって来た。このころ宮路十次郎、同清左衛門の2組のセンズがいた。

鯨の解体をする前に、恵比須様に対しての儀式がある。

クジラキイのセンズが1人で鯨の上のり、左肩のところの皮を2尺4方に切ってはぎとる。

これをまた1寸角ほどの大きさに切ったもの4きれを作って鯨の上に立ち、「エビッサー」と囀えながらそれを4方に向けて1きれづつ投げける。この2尺4方の皮肉は、後で部落の恵比須様に供えて祭りをする。

これが終ると鯨の解体が始まるが、まず、ヤマホコ（薪などを担ぐ木の棒で両端の尖ったもの）を用いて、鯨の心臓部を突き刺す。ものすごい量の血がドツと吹き出るように流れだし、鯨は最後の力をふりしぼるようにオバで地を叩きあるいは左右に振り廻し大暴れする。このため砂浜に大きな池のようなくぼみができる。

これからいよいよクジラキイの連中による肉切りが始るのであるが、肉の切り方は数人で、2尺4方に皮を切り、肉を切り、といったような作業をくり返してゆくのである。

鯨捕りを手伝った人達には、網子はもちろんだが、その他の者でも役目に応じて、それぞれ肉や皮が分配される。

この日、大敷網の納屋場では、鯨の料理が出る。納屋の大鍋で鯨肉の味噌煮が作られ、見物の人々にもいくらかでもたべさせたものである。オバやタツパは網主のものとなり、分配した残りの鯨は売られる。

鯨がとれれば七浦にぎわうと言われ、鯨が大敷網に入ったとなればその浦中（漁村中）がまるでお祭りのようにぎわいになるのである。

この鯨捕りの話の時代は、明治から昭和のはじめにかけてのころである。